

企業内実践コミュニティの設計・運用支援ツール プロトタイプの開発

Prototype Development of Tools to Support the Design and Operation of
Communities of Practice in Companies

外山 隆一^{*1}

江川 良裕^{*2,1}

鈴木 克明^{*2,1}

平岡 斉士^{*2,1}

Ryuichi TOYAMA

Yoshihiro EKAWA

Katsuaki SUZUKI

Naoshi HIRAOKA

^{*1} 熊本大学大学院社会文化科学教育部教授システム学専攻

^{*2} 熊本大学教授システム学研究センター

^{*1} Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

^{*2} Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University

<あらまし>企業内実践コミュニティの活動支援として「設計・運用支援ツール」のプロトタイプを開発した。既存の実践コミュニティに適用した結果、先行研究の企画テンプレートでは抽出できなかった新たな項目が抽出できた。この支援ツールにより個人の能力の違いによる影響を軽減できたかどうかはわからないが、今後はその課題解決に向け取り組む必要がある。

<キーワード>実践コミュニティ, 企業内教育, インストラクショナルデザイン, 経験学習

1. はじめに

企業を取り巻く環境は劇的に変化し、企業自身もそれに合わせて変革することを余儀なくされている。そしてその変化に応じたタイムリーな従業員教育が求められている。

この問題を解決する方法として実践コミュニティ (Community of practice, CoP) が着目されている。特定の領域において従業員どうしが実践を共有しあう”場”を設けることで、タイムリーな組織的学習が行われることが期待されている。

この実践コミュニティに関する先行研究は多く、そのデザインに役立つさまざまな事象が明らかにされている。一方で実践コミュニティの設計・運用を容易にするためのツールに関する研究報告はまだ多くはない。

権藤・合田(2013)は実践コミュニティの設計を支援する企画テンプレートを開発し、さらに長山(2022)はそのテンプレートを「大学教育の質保証研究会」で活用した。これら先行研究における企画テンプレートでは、実践コミュニティの立ち上げに必要な項目を網羅的に記載できるが、それが有効に機能するかどうかは、それを運用する人間の能力によるところが大きい。

一方で実践コミュニティの専門知識を有する者は限られているが、運用する側の能力によらず、安定して実践コミュニティの設計・運用が行えるよう支援するツールへのニーズは強い。

2. 目的

本研究の目的は、企業内の実践コミュニティの発展過程第1段階(潜在)～第2段階(結託)(ウェンガーら, 2002)において、コーディネータの設計・運用の活動支援を行うためのツール(プロトタイプ)を開発することにあつた。

これによりコーディネータ個人の能力の違いによる影響を軽減し、安定して実践コミュニティの設計・運用が行えることを目指している。

3. 方法

3.1 プロトタイプの開発

今回の設計・運用支援ツールプロトタイプの開発では、実践コミュニティが上手く機能しているか考える上で基本となる以下4つの視点に着目した。そして各視点において、本支援ツールを活用することで、コーディネータが具体的な打ち手を安定して考案できるようになることを目指した。

- (1) 交流が活発になされているか
- (2) 実用に役立てられているか
- (3) メンバーが成長しているか
- (4) 形式知が内外で活用されているか

まずそれぞれの視点に対して行動目標を設定し、各行動目標に対応した「目標達成の為の設計の方向性」を記した。これらは、エティエンヌ・ウェンガーら(2002)で述べられている「実践コミュニティ育成7原則」と、実践コミュニティで

陥りやすい不調とそれの場合の対策に関する記述を参考に作成した。そしてこの「目標達成のための設計の方向性」については、それらを記載する上で参考にしたウェンガーら(2002)の該当ページを併記し、それを読むことで内容の詳細を確認できるようにした。

これらを足掛かりにして、「具体的な仕掛け」、「運用方法」、「目標を達成したことを評価する方法」を記載することで、実践コミュニティの具体的な仕組みや運用方法を、安定して考案できるようになることを目指した。

以上により図1に示す設計・運用支援ツールプロトタイプを作成した。「目標達成のための設計の方向性」は全32項目となった。

視点	行動目標	目標達成のための設計の方向性	引用元	具体的仕掛け	運用方法	評価方法
1	1. 交流が活発になさ	進化を前提とした設計を行う。	第3章 実践コミュニティ育成の7原則(p95)			
2	2. りているか	内部と外部それぞれの視点を取り入れる。	第3章 実践コミュニティ育成の7原則(p97)			
3	3. するようになる。	様々なレベルの参加を奨励する。	第3章 実践コミュニティ育成の7原則(p99)			
4	4.	公と私それぞれのコミュニティ空間を作る。	第3章 実践コミュニティ育成の7原則(p102)			
5	5.	価値に焦点を当てる。	第3章 実践コミュニティ育成の7原則(p104)			
6	6.	親近感と刺激とを組み合わせる。	第3章 実践コミュニティ育成の7原則(p106)			
7	7.	コミュニティのリズムを生み出す。	第3章 実践コミュニティ育成の7原則(p107)			

図1：設計・運用支援ツールプロトタイプ
(一部を抜粋)

3.2 プロトタイプの評価

2022年5月に筆頭著者がコーディネータとして企業内で立ち上げた実践コミュニティの事例に当てはめて、本研究の設計・運用支援ツールへの記載を行った。記載は筆頭著者が実施した。

ツールに記載された項目のうち、何項目打ち手を考案できたか、またそれらの記入にあたりどのような困難があったかを記録した。

更に先行研究である権藤・合田(2013)の企画テンプレートも併せて記入することで、両者に記載された打ち手の比較を行った。

4. 形成的評価の結果

実際の実践コミュニティの事例に当てはめて筆頭著者が記入したところ、32項目中25項目について具体的な仕掛けを記載できた。そのうち先行研究の権藤・合田(2013)の企画テンプレートと内容的に重複が無かったものは23項目であった。

一方「目標達成のための設計の方向性」の記載内容については、表現が曖昧で判断に迷う場面があ

った。またその際に引用文献の該当ページを参照しても、該当ページを読むだけでは理解が難しく、結局はその前後も含めて読むこととなった。その為相変わらず記入者の能力に頼る部分が多く、最後まで記入することはかなり骨の折れる作業であると感じた。

5. 考察と展望

本研究では、「実践コミュニティ育成7原則」と「実践コミュニティで陥りやすい不調とそれの場合の対策」を主体に作られた「目標達成のための設計の方向性」が、実践コミュニティの設計・運用支援ツールに活用できる可能性が示された。

しかしこの支援ツールによって個人の能力の違いによる影響を軽減できたかどうかは、筆頭著者自身が記入しただけではわからない。

今後はこの課題解決に向け取り組む必要がある。

参考文献

- エティエンヌ・ウェンガー、リチャード・マクダーモット、ウィリアム・M・スナイダー(著)、野村恭彦(監修)(2002)、コミュニティ・オブ・プラクティス ナレッジ社会の新たな知識形態の実践、翔泳社
- 権藤俊彦・合田美子(2013) 実践コミュニティの設計を支援するテンプレートの開発、教育システム情報学会第38回全国大会(金沢大学)発表論文集:115-116
- 長山琢磨(2022) 実践コミュニティ設計テンプレートによる継続的な学習コミュニティ運用の再設計、熊本大学大学院 社会文化科学教育部 教授システム学専攻 2021年度提出修士論文